

因念君天心全集

4

平凡社

岡倉天心全集（全八巻）

第四巻 定価 五四〇〇円

一九八〇年八月二日 初版第一刷発行

著者 岡倉天心

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町四番地
郵便番号一〇二
電話〇三（二六五）〇四五
一 振替東京八一二九六三九

印刷 東洋印刷株式会社
製本 株式会社石津製本所

凡 例

一、本全集は、岡倉天心の著書、著述、講演、談話、未発表草稿、日記、ノート、書簡などを、現在可能な限り蒐集し、これに関連資料を付して、集大成したものである。

二、著書、雑誌、新聞に発表された論稿は、原則として初出を底本とし、自筆原稿あるいは異本との異同を校訂した。

三、英文の著書、著述、未発表草稿、書簡は、厳密な校訂をほどこした後、すべて新訳して収録した。

四、自筆の日記、旅行日誌、古社寺調査類等のノートなどは、できるだけ原型を損わぬよう翻刻した。

五、収録文は底本を忠実に翻刻することを旨としたが、読解の便宜をはかるため、次の方針で整理した。

1 原題のない草稿や新聞掲載の講演速記などには、編者による標題を掲げた。

2 漢字は新字体を使用し、俗字・略字は通行の字体に改めた。

3 あきらかな誤字・誤植は訂正し、誤使用あるいは正誤を判断しかねる用語・用法には、その初出に「ママ」を付した。また、現在通行の用法では誤字・誤記に類する用法も、文意が通ずるかぎりは敢えて改めなかった。

i 凡 例

4 仮名遣い、平仮名・片仮名の別、および濁音表記は底本通りとし、変体仮名(例 ま↓れ)、合字(例 片↓トモ)などは通行の文字に改めた。

- 5 底本が自筆原稿の場合、文意の通じにくい字句、固有名詞の誤記などは「」内に註記した。(例 渴ヲ医スル〔ニ〕足ル、姜委〔編〕)
- 6 句読点、改行、字下りなどの扱いは、通行の方式にしたがって整理したが、底本が自筆原稿、書簡などで句読点のない場合は、おおむね句点にあたる箇所および読み誤りやすい箇所を一字あけにした。
- 7 みせ消ちは原則として翻刻せず、内容理解に必要と思われる場合のみへゝ内に翻刻した。
- 8 破損、その他判読不能の箇所は、□□、□□、□□□□のように示した。
- 9 必要に応じてルビを付し、現代仮名遣いをもって表記した。底本が総ルビの場合は、特殊な読み方などを残し、他は省いた。
- 10 天心作の漢詩は第七巻で一括して註釈を付すため、本文中では白文のままとした。

本巻(第四巻)には、美術史関係を一括して収録した。

「日本美術史」「泰西美術史」「泰東巧藝史」は、いずれも岡倉の講義の筆記録であり、「泰東巧藝史講義メモ」は岡倉が講義のためにメモした草稿である。

「日本美術史編纂綱要」は、「日本美術史」と重複する部分を省略して収録した。

なお、「泰東巧藝史」と「泰東巧藝史講義メモ」の別表は、「泰東巧藝史講義メモ」の途中に別刷折込として収録した。

目

次

凡例

日本美術史

- 序論 5 推古以前 10 推古時代 15 天智時代 41 天平時代 50 平安時代 66 鎌倉時代 89 足利時代 109 豊臣時代 122 徳川時代 127 総叙 159

泰西美術史

- 総論 171 埃及 178 アツシリヤ 184 波斯 189 フィニシヤ、カルセージ、ジュデヤ 191 希臘 193 エトラスカ 212 羅馬 213 中世 218 近世 225

泰東巧藝史

- 緒論 259 古代藝術 267 六朝・三韓・飛鳥朝 278 唐・奈良朝（仏教的巧藝前期） 287 晩唐・五代・北宋（仏教的巧藝後期その一） 295 平安朝（仏教的巧藝後期その二） 297 世間的巧藝 唐・奈良朝以後 306 現代 315

v 目 次

泰東巧藝史講義メモ	317
日本美術史編纂綱要	373
解説	508
吉沢 忠	
解題	524

岡倉天心全集 第四卷

日本美術史

序論

世人は歴史を目して過去の事蹟を編集したる記録、即ち死物となす。是れ大なる誤謬なり。歴史なるものは吾人の体中に存し、活動しつゝあるものなり。畢竟古人の泣きたる所、古人の笑ひたる所は、即ち今人の泣き、或は笑ふの源をなす。往昔吾人の祖先は三韓を征服し、蒙古の大軍を撃破せり。吾人は當時に生存せざりしと雖ども、三韓征伐、蒙古襲來の事蹟は歴然として吾人思想の一部をなし、吉備公及び弘法大師が唐に入りて持來りたる文学技藝、家康、綱吉が奨励せし近世の文学も亦吾人知識の一部をなし、金岡、雪舟の画は吾人が画を作る原素となり、薬師寺の薬師、法隆寺の壁画等に至りては、如何にして之れを作りしや、其の方法すらも知る能はざるも、所謂天平式なるものは吾人の血中に存在す。藤原氏盛時の美術、吾人之れを知るべからざるなり。然れども尚ほ藤原式として吾人を益するなり。若し雪舟、相阿弥なかりせば、我邦今日の美術は決して現在の如き有様ならざるべし。推古、天平、藤原、東山、皆吾人思想の一部をなし、始めて吾人あるなり。今小学校生徒をして紋様を画き、唐草を作らしむるも、自ら外邦に超絶するの趣味を有す。是れ即ち古來幾多の変遷を経たる日本美術なる思想の、我が大和民族の頭脳中に存在して然らしむる可きにあらざるを得んや。

5 日本美術史

美術史を研究するの要、豈啻^{あたな}に過去を記するに止まらんや。又須らく^{すべ}未來の美術を作為するの地をなさざるべからず。吾人は即ち未來の美術を作りつゝあるなり。顧れば、溟濛として半ば其の形状を没するの過去あり。前

には渺茫として際涯を知らざる将来あり。此の両間に処して其の任を全うせんとする、亦難い哉。殊に明治今日に於ける吾人の責任重且つ大なるや言を待たず。諸子知らずや、学藝、技術、宗教、風俗等、皆其の基準に於て大變動を生ぜざるを。此の時に方りて、美術独り超然として其の影響を蒙らざるの理あらんや。

現在美術の、過去将来の中間となりて之れを結合するの任重きこと、我邦独り然るにあらず。十九世紀は是れ世界大變動の時期にして、其の原因をなすところは種々なるべきも、主なるものは唯物論の勢力を得たること是れなり。彼の高遠無辺なる空想を以て主となしたる宗教にして、尚ほ且つ將に実物的たらんとす。美術の如きに至りても亦実物的ならざれば世に容れられず。一に実物に接近して靈妙に遠ざかれる以太利文学再興以來、此の方向を取りて滔々として底止する処を知らず。器械的學術の進歩は器械的思想を進め、其の思想は宗教道徳にすらも影響して、其の標準をして器械的たらしめ、人の罪を犯すものを罰するに方りても、恰も權衡を以て之れを量るが如く、何々の罪を犯せり、故に罰金幾何云々とす。亦精密なりと云ふべし。文学の如きも漸々高尚なる思想を離れて器械的文学を生ぜんとす。社会万般の事、已に此の如し。故に美術亦之れに化せられざるを得ず。日に月に写生に流れ、其の甚だしきものに至りては、一凶を作らんとすれば先づ予め凶をなし、而して之れに応ずるの人物を写真して以て之れを描く。其の各部分に至りては、皆是れ無味淡々たるの写真に過ぎず。彼の実真爛漫として飛動するが如き真率なる風趣に至りては、滅尽して其の痕跡をだに留めず。是れ即ち歐洲美術四百年來の有様なり。之れが救済を謀る者の任重しと云ふべし。

然れども吾々日本人たるものは、過去の日本と將來の日本とを結び付くるの時に際して、其の責任更に重しと雖ども、理學進歩の今日は從來の如く暗中に事に従ふにあらずして、自ら反省して我が行為の不可を知るの時なり。故に大いに吾人を益するなり。或學者曰く、人の漸く己れを省るに至れるは、是れ丁年に達せしなり。古

人は幼稚にして茲に至らざりしなりと。吾人試みに史を繙ひもときて古來盛衰存亡の跡、英雄豪傑の末路を鑑みるに、皆是れ同一轍にあり。文事を愛するものは流れて懦弱となり、武事を尚ぶものは粗暴に陥る。若し彼等をして歴史に鑑みるあらしめば、未だ必ずしも此の如くならざりしならん。又從來の美術家にして歴史なるものを知らば、徒らに古人の糟糠に甘んずることなくして一層の進歩を見しなるべし。徳川時代の美術家にして奈良朝の美術を知りたらんには、二百年の長年月、探幽一人の爲めに使役せらるゝが如きことなかりしならん。畢竟、皆是れ美術を究めざるが故なり。歐洲に於ても七八十年前迄は諸説紛々として是非一定せざりしが、近来に至りて之れが研究に従事するもの漸く多く、古來大家と称せられし人も其の地位を失して平凡となり、一方には余り知られざりし人も始めて眞の価値を生ずるに至れり。我邦に於ても亦、平凡にして大家とせらるゝ人、及び眞の大家の人に知られざるものあるならん。此の如き事を研究するは皆美術史に拠らざるべからず。美術家たる者、之れを研究せば能く己れを知る事を得るのみならず、又世人をも知ることを得て、美術を誤ることなきに庶幾もからんか。

美術哲学に於て、基礎を置いて帰納するものあり。事実を集めて演繹するものあり。美術史は即ち第二のものに屬す。或一派の美術家に至りては第二のもののみを主とす。然りと雖ども、完全なる美術史を得るは到底期し能ふことにあらず。先づ概略の沿革を挙げ、又其の時代の精神如何を示し、如何なる景況にして、文学宗教とは如何なる關係を有もち、各時代大家は如何に世を支配し、又如何に世に支配されしか、又如何に後世を益せしか等は、皆研究せざるべからざるものなり。余豈斯かの如きことを知悉するを得んや。然りと雖ども若し其の一を欠かば完全の美術史と云ふ能はず。故に到底完全無欠の美術史を講ずることを得ず、必ずや諸君の望みを充たすこと能はざるべし。カレー曰く、事實は立体なり、歴史は線なりと。線を以て立体を説明せんとす、固より難事たり。殊に東洋美術史に至りては、從來殆ど之れを研究せしものなし。本朝画史の類、二三ありと雖ども、古書に

扱りにて画人の伝を列ねたるに過ぎず、其の画人各個間の關係等に至りては之れを記するの書なし。世に画家彫刻家等の系図ありと雖ども、是れ亦信を措くに足らず。或は其の名のみにして、實在の如何を知ること難きものあり。彼の中世の名家、住吉慶恩の如し。其の画く所のみを伝へて、其の人の存在せしや否や、史伝の徴すべきなし。又周文に二人あるが如きは人の知る所なりと雖ども、可翁にも亦三人ありと。此の如く紛々たる有様にして、完全の美術史を究めんとす、余等が短才淺識の能ふ所にあらざるなり。又美術史を編述するに方りては、古物を鑑定するの明を要す。是れ難事中の難事たり。世に誰々の筆なりと称するものも、信すべきもの少なし。時に落款の扱るべきありと雖ども、之れなきものに至りては、古鑑定家の言、信じ難きにあらずや。例せば、現時に存在する絵巻、其の画者と書者との時代に相違あるは殆ど普通のことにして、其の言の信するに足らざるを証するにあらずや。唯自己の活眼に依るべきのみなり。此の如く種々なる困難のあるありて、完全なる美術史を望むこと倍々難し。又仮令史上の事実山積するも、何れを以て真の事実となさんか、其の時代の大勢を洞察するの断見なかるべからず。然れども是れ亦尋常士人の能くする所にあらず。況んや余が如き淺学不才の能くする所にあらざるなり。

然れども余が幾分か知り、幾分か聞き、又幾分か自信する所を以て諸君に述べんとす。其の大部分よりすれば大過なきを信するも、其の一部分に至りては誤謬を免るゝこと能はざらん。諸君之れを諒察し、閑暇を得ば一意美術史の研究に従事し、未だ世に知られざるの大家をも発見し、其の他万般美術史の材料を供して、其の大成を期せられんことを望む。

其の順序は東洋を先にし、西洋に移り、終りに至りて現今諸家美学の大要を述べんとす。

東洋美術史を講ずるに方りて、我邦を以て主となし、支那美術の沿革の如きは、我が美術史を説明するに足る

を以て止めんとす。其の故は、支那美術史の材料は之れを集むるに容易ならず。或は曰く、其の材料の我邦に多くして却て彼れに勝ると。然りと雖ども、其の真偽詳つまびらかならざるもの甚だ多し。東山時代に於けるが如きは、支那美術は大いに輸入せられたれども、其の某氏の作、某氏の筆と称するものも直ちに信ずること能はざるが如し。

日本美術史は最初より述ぶべきなれども、茲に推古以来を以て日本美術史となしたり。其の故は推古以前の美術は寧ろ古物の性質を帯ぶるものにして、稀れに美術と称するに足るものもあるも、其の伝来詳かならず。美術として系統を立て、述ぶべき程のものあるなし。然れども美術なるものは、突然として出づるものにあらず。必ず其の発達すべきの原因なかるべからず。推古朝の美術は厩戸皇子の奨励により仏教と共に突然起りたるに非ずして、此れ以前に於て既に其の要素備はれり。欽明朝に於ける仏師仏像の渡來の如きは其の近因をなし、紀元以来千有余年の間に養成せられたる美術の要素、此の時（即ち推古朝）に至りて開發せられたるなり。

以上の理由を以て、推古以前日本美術の大体を述ぶるも亦必要なりと信ず。